世界を繋ぐ日本の税

四天王寺中学校3年2組　西田（にしだ）　璃真（りさな）

世界には貧しい国が沢山ある。テレビを見ていると、ユニセフがCMで募金を呼び掛けていたり、ニュースで重度の栄養不良に苦しむ子供たちの厳しい現状が伝えられたりしている。けれどそれは何年も前からのことで、私が見ている分ではあまり現状が改善しているようには思えない。そのような会話を家族と交わしていたら、兄が日本でも発展途上国を援助している取り組みがあって、それをODA（政府開発援助）というのだと教えてくれた。初めて聞く言葉だった。私は詳しく知りたくなり、自分で調べてみることにした。

ODAとは主に先進国の政府が発展途上国の経済開発などを促進するために財政資金を使って供与する援助のことである。お金だけではなく、技術的な面やボランティアを派遣することでも援助する。その財源の内訳は、七割が国の財政投融資、三割が税金で賄われている。税金が他国の為にも使われているのだと初めて知った。まだまだ援助が十分ではなく、現状が改善されていないと思っていたが、日本の税金で助けられている命があるということを知り、嬉しくなった。同時にふと疑問にも思った。自国の税金を他国のために使ってもいいのかと。しかしよく考えてみると、日本に災害が起こった時は海外から多くの支援があり、私だけでなく多くの国民が感謝していることだろう。国同士の助け合いに税金が使われるのは当然のことなのだ。税金は日本と他国とを繋ぐ大切な役割を担っていると痛感した。

ますます税金について知りたくなってきたので、父にも話を聞いてみた。父が仕事の関係で数年前にカンボジア租税総局視察団の日本引率責任者として従事した時の話を聞かせてくれた。カンボジアは都市部では急速な経済発展が進んでいる反面、農村部では経済格差から貧困が進み、多くの人々が苦しんでいる。また、カンボジアの税制は、個人の申告制度が日本に比べてあまり整備されておらず、

租税収入もままならない状況で自立への課題の一つにもなっている。そこで、カンボジア租税当局の視察団が日本の申告制度の研修に来たのだ。カンボジアから遠い日本にはるばる制度の研修に来るということは、日本の税制がそれだけ素晴らしいものだということだろう。またカンボジアは他にも様々な改善すべき問題を抱えているにもかかわらず、日本の税制を学びに来るということは税の仕組みそのものが大変重要なのだと気付かされた。

日本の税金だけでなく、税制までもが他国の役に立っているとは驚きだった。税金に世界を繋ぐ力があるなんて思いもよらなかった。これらを踏まえて、しっかりと税の使い道や仕組みなどに関心を持ち、理解をした上で、将来日本国民の一人として税金を納めていきたい。日本のために。世界のために。